

日本語と漢字

(第35回 海友フォーラム)

加藤 健二

文春新書「漢字と日本人」から

著者：高島俊男・・1937年生れ、兵庫県相生出身、東京大学大学院修了。中国語専攻。

言葉とは、人の口から発せられた音を聞いた人がその内容を理解し、会話が成り立っている。現在の日本語は、音に付随する文字を介在させないと会話が成り立たないことが多い。

【1】漢字がやってきた

1) 同じ音の言葉がいっぱい

・問題提起「カテーノモンダイ」

校長先生は「仮定の問題」と言ったが、新聞記者は「家庭の問題」と受け取った。

「カテー」は他にも「過程」、「課程」などもある。

同じ音の例

・「コーセン」 普通の小型国語辞典から

光線、公選、交戦、抗戦、口銭、鋼線、鉦泉、高専、公専、香煎、・・・と十以上ある。

・「センコー」

専攻、選考、閃光、穿孔、先行、線香、潜行、潜航、戦功、専行、選鉦、鮮紅、遷幸、・・・と二十以上ある。

「ジテン」も「言葉の辞典」「物事の事典」「文字の字典」がある。

なぜ混乱が起こらないのか。それは夫々の言葉の背景に漢字が張り付いているからである。

言い古された例で、「キシヤのキシヤはキシヤでキシヤされた」

2) 漢語と漢字

かつて日本に文字はなかった。千数百年前に中国（初期は朝鮮半島経由と想定される）から漢字が入って来た。日本人は言葉を表す文字として漢字を苦労しながら使い始めた。

・「かつて日本に文字はなかった」

・「中国から漢字が入って来た」

非常に発達した、整備された文字体系になったものが入って来た。

3) 「恩恵であったか？」

日本が漢字を貰ったことは、日本語には不幸なことであった。

第一に、日本語の発達がとまってしまった。

「理、義、恩、智、学、礼、孝、信、徳、仁、聖、・・・」これらはみな抽象的な概念である。

概念があるから言葉がある。言葉がないという事は概念がないということ。

発達した漢語と漢字が入ってきて、日本語は自分で新しい言葉を生み出す能力を失った。

第二に、似ても似つかぬ言語を書き表す不便。

日本語と漢語は、元々全く別個に生まれた言語で類縁関係は全くない。

日本語の系列はまだ分かってなく、地球上でどこにも親戚のいない言葉。

4) 漢語とはどういう言語か

漢語は、原則としてすべての単語が一音節で、その単語が一つの文字で書かれる。

音節とは、人が言葉をしゃべる時に口から出てくる音の最小の単位をいう。

日本語では、全体で百くらいの音節がある。

英語では、英語の音節は三千くらい。一音節の例「DOG」「CAT」「SPRING」「STRENGTH」

さて、漢語の音節は千五百くらいであるが、どの音節も「声調」を持っている。

「平声」、「上声」、「去声」、「入声」の四種。これを加味すれば四倍になる。

漢語は単語が二つ集まって二音節のかたまりになって安定する。「学校」「教育」など。

特に、同じような意味を持つ単語を二つ並べた言葉が非常に多い。それがそのまま日本に入ってきて、日本人に負担をかけてきた。今もかけ続けている。

「負担」「闘争」「健康」「尊敬」「樹木」「道路」などなど、こんな言葉が何千もある。

5) 漢字の音と日本人の発音

漢字の音は漢語では字ごとに違っているが、日本人の発音は非常に不器用で、音節と声調の真似が出来ずに異なった文字も同じ音になってしまった。

「セー」は生、正、性、政、聖、姓、静、精、清、・・・こうなると守備範囲が広すぎて意味を持ちえず、単なる「オト」になってしまう。これが後々に混乱することになった。

【2】日本人は漢字を加工した

1) 「訓」よみ

漢字が日本に入ってきてから数百年のあいだに、それを日本語を書き表す文字として使うために加工をしてきた。

漢字を、その意味によって直接日本語で読むことにした。

例、「犬」の字、これを音では「ケン」を「いぬ」と読むことにした。

これは相当奇抜な所業であり、一大飛躍であった。

「犬」を「いぬ」と読むことにしたが、「犬」を「ケン」という本来のよみも保存した。

この両者を区別して、「ケン」を「音(おん)」とよび、「いぬ」を「訓(くん)」とよぶ。

「音」とは「その字の発音」ということ、「訓」とは「その字の解釈、意味」ということ。

その「訓」は「日本語による意味説明」なので、かならず和語(わご、やまと言葉)。

「訓」がいつ頃できたものか、古いことなので分からない。

万葉集では「訓」を自由自在に使いこなしている。

優に二百年、或いはそれ以上の経験の蓄積があると思われる。

・万葉集の天智天皇の歌

渡津海 乃 豊 旗 雲 爾 伊理比紗之 今夜 乃 月夜 清 明 己曾
わたつみの とよはたくもに いりひさし こよひのつくよ すみあかくこそ

これは赤字の八文字が「音」よみで、十四文字は「訓」よみ。

- ・古事記ではスサノオノミコトがクシナダヒメと結婚して新居をいとなんだ時の歌
夜久毛多都 伊豆毛夜弊賀岐 都麻碁微爾 夜弊賀岐都久流 曾能夜弊賀岐袁
やくもたつ いづもやへがき つまごみに やへがきつくる そのやへがきを

天智天皇の歌の「渡津海乃豊旗雲」なら字の意味が語の意味だが、古事記の「伊豆毛」や「夜弊賀岐」はオトをあらわしているだけで、「出雲」や「八重垣」の意味はない。

- ・漢字の訓読みは相当複雑な事態を招いた。

「雲」と「くも」、などは一対一だが一対複数が非常に多くある。

漢語で動きが上方にむかう（むかわせる）ことを言う語には、上、升(昇)、登、騰、
挙、昂、揚、起、掲・・・などがあり、これらを「あがる」と訓読みするのは上、挙、昂、揚、
騰で、「あげる」と読むのは、上、挙、揚、「のぼる」は、上、升、登で、さらに、「上」は
「うえ」「かみ」の読みもあり合計五つの訓読みがある。

最も訓読みの多いのは多分「生」であろう、うむ、うまる（うまれる）、いきる、はゆ
（はえる）、おふ（生ひたち）、なす（生さぬ仲）、き（生薬）、ある（みこは生まれましぬ）
ふ（芝生）、なま、うぶ と十種以上の読みがある。

- ・日本人の神業

「十一月の三日は祝日で、ちょうど日曜日です」

こんなむずかしい「音」「訓」交じりの文章を日本人は毎日のように相手にしている。

「日」という字が4回も出てくる。これを日本人は一瞬にして判断し、読み分ける。

ほとんど神業としか思えないが、日本人は、よほど頭の働きの早い人ばかりが集まった、
世界でも珍しい天才人種に違いない。

2) 「かな」の誕生

かなは、本の行間にチョコチョコと書き込みするところから生まれた。中国から来た本に
日本語を漢字で書く。行間で狭いし、手早く書いて自分が分ればいので、簡略化して書く。

「阿」を書くのに左側の「ㇿ」だけをサット書くと、長めの「ア」みたいな形になる。

同様に「伊」を左側の「イ」と書く。こうすれば行間の狭い場所に書き込みやすくなる。

この部分取りの他に全体の姿はそのままに、部分を省略するやりかたで、これは草書から
きている。「以」を「い」、「呂」を「ろ」、「波」を「は」などで、大体においてカタカナは
部分取り、ひらかなは全体取りで出来ている。

西暦828年に仏書に書き込まれた「かな」の記録がのこされている。

かなのなかではカタカナのほうが地位は高い。カタカナは漢字に附属する。

「上」が「のぼる」の意味である時には「上」の右下に小さく「ル」を書く。「上ル」

いわば漢字の子分だからひらかなより地位が高い。

3) 日本語の素性

現在の日本語は、おおむね四種の語群より成る。

一つは「和語」で「やまとことば」とも言う。本来の日本語である。

二番目は「字音語」で、これは漢語と和製漢語より成る。和語と字音語とで日本語の

約85%をしめる。

三番目は「外来語」である。現在の日本語の10%くらいを占める。

「学校」「教育」などは除外、「ベッドタウン」「マイカー」「ガソリンスタンド」は含む。最後は「混種語」「まぜこぜ語」。外来語と和語、外来語と字音語が組み合わさったのが、「輪ゴム」、「食パン」、「プロ野球」などの類がそれで、和漢外の混種語は滅多にないが、「半袖シャツ」「駅前ビル」など。混種語は現在の日本語の5%位を占めている。

・「まぜこぜ語」いろいろ

混種語は、漢語が入って来て以降にでき、百数十年前に西洋語が入って以降にまた出来た。よくなじんだ西洋語と日本語を組み合わせて混種語を作った。「ガラス窓」、「金ボタン」、「郵便ポスト」など。これと同じことを漢語がきて以後の千年あまりの間にも日本人は作り続けてきた。万葉集のころから出来始め、平家物語（鎌倉時代）には「座敷」、「勢揃」「分捕」など現在でも使われている言葉が多数出てくる。和漢混種語の例としては、台所、気持、小僧、荷物、場所、貯金箱等々。

4) 「和製漢語」ができてきた

日本語に漢字をあて、後にそれを音読するようになったものと、初めから字音語として作られたものがある。明治以降の和製漢語はほぼ全てが字音語で圧倒的に多い。時期の点では、日本語を漢字で書き、それをあやまって或いは故意に音読したものが古い。「かへりごと」を漢字で「返事」と書き、音読し「ヘンジ」、役人などが用務で他所へいく「ではる」を「出張」と書き、音読されて「シュツチャー」になった。「ものさわがし」を「物騒」、「おほね」が「大根」、「ひのこ」が「火事」などがある。また漢語と和語の組合せから出来た和製漢語もある。「造作なし」から「無造作」、「番にあたる」から「当番」、「念を入れる」から「入念」など。

5) 江戸時代までの和製漢語

一つは、そのほとんどが、耳で聞いてわかることである。まぎらわしい言葉がない。「奉行」「与力」「同心」「代官」「家老」「番頭」「坊主」などなど、明治以降の和製漢語は、「セイシ」といっても「製紙」「製糸」「静止」「制止」・・・や、「セイカギョウ」を営んでいますも「製菓業」「生花業」「青果業」「製靴業」か判らない。江戸時代までの和製漢語のもう一つの特徴は、漢字の意味から言葉の意味がでてこない。「野暮」「世話」「面倒」「大切」「無茶」など。言葉の意味は、字からではなく、日本人の生活の中から、あるいは、意味は日本人の日々の生活の中にある。即ち健全である。明治の和製漢語がひたすら個々の漢字の意味にたより、それが耳にどう聞こえるかを考慮せず、日本人の生活と遊離したところで生産されたのと正反対である。

6) 明治以降 新語の洪水

明治維新以後、日本は西洋のありとあらゆるもの全ての西洋語を日本語に訳した。それに漢字を当て、数万語の和製漢語が誕生した。江戸時代までの和製漢語は耳で聞いて分かるが、文字をにらんでも意味が分からない。

明治の造語はこれと反対で字を見ると見当がつく。例えば、電燈、電線、電話、電流、・・・など「電」の字がついていれば電気に関係ある言葉ですべて理詰めだが、音のことは何も考えていない。誰も気にしなかった。日本で「コー」と読む字は三百以上ある。(公、口、工、交、高など)「トー」と読む字は二百以上ある。それらを組み合わせて言葉を作るのだから、同音の語の発生などを考慮しては短期間に何万もの語を作り出せるはずがなかった。

「電線」は「伝染」と同じ音だが、誰もきにしなかった。

【3】まとめ 厄介な重荷

地球上の全ての言語が文字を持つわけではない。文字を伴わない言語もその役割を十分に果たしている。すなわち、文字は言語にとって必然のものではない。

ひとり日本語のみが例外である。

漢字伝来、特に明治維新以後西洋の事物や観念を和製漢語に訳し、これらの言葉が日本人の生活と思想の中心部分になって以降その語彙のなかば以上は、文字の裏付けなしには成り立たない。現代においても、ごく身近で具体的な物や、動作などには、本来の日本語(和語)が使われている。これらは耳で聞いてわかる。

しかし、やや高級な概念や明治以後の新事物には漢語が使われる。例えば「伝統」と同じ音を持つ「電燈」と区別するものは「伝統」の文字である。

特にやや知的な内容の話は、音声を手掛かりに頭の中にある文字を素早く参照するということを繰り返しながら進行する。

音声が無力なため、言葉が文字の裏付けをまたなければ意味を持ちえない、という点から日本語は、世界でおそらくただ一つの、きわめて**特殊な言語**で、**畸形的な言語**である。

・日本語は健全なすがたに変わり得るのだろうか。

日本語は畸形のままで成熟してしまった言語であるから、それは不可能である。と考える。

これをしいて完全に正常にしようとするれば、日本語はきわめて幼稚なものになる。

明治初期以来、音標文字運動があり、漢字を捨てて、かなやローマ字で文章を書いても十分に通じると主張するグループが出来た。

例えば、「ふるいでんとうのあるがっこうにはいった」が通じるのは、読む者が頭の中で「伝統」を参照しているからで、日常生活上「デントー」は「電燈」のための音声として残るとなれば、「伝統」という語と概念は消えることになり、この概念を表す別の語を作り出さねばならなくなる。同様に、「カテー」は「家庭」、「コーセン」は「光線」が残るとなれば、他の複数の同音語は別の語に改めなければならない。

漢字は、日本語にとって厄介な重荷である。それも、体に癒着してしまった重荷である。しかし、この重荷を切除すれば日本語は幼児化する。へたをすれば死ぬ。

この、体に癒着した重荷は、日本語に害をなすことが多かったが、これなしにはやっつけられないのも確かである。**腐れ縁**である。

この言葉は「くされ」が和語で、「縁」は漢語で、これが合わさって一語になっている。日本語全体がこの「腐れ縁」という言葉のように、和語と漢語との混合で出来ていて、その関係はまさしく「腐れ縁」なのである。

日本語は、畸形のまま、生きてゆくよりほかに生存の方法はない。(著者の考えである)